JLTA Newsletter
日本言語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 13　　発行代表者：大友 賢二　　2002 年 (平成 14 年) 5 月 18 日発行
発行所：日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758　TEL 026-275-1964　FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp　URL: http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2002 年度の委員名簿・年間活動計画 (案)

2002 年度の JLTA 委員会構成 [◎ Chair, ○ Vice-Chair] と、活動 (案) をお知らせいたします。会員の皆様もご協力をよろしくお願いいたします。

【編集委員会】◎ Randy Thrasher, ○ J. K. Hubbell, 浪田克之介, 清川英男, Steven Ross, 根岸雅史

＊ Journal No. 5 査読 5 月 1 日より、9 月下旬発行予定

【広報委員会】◎ 中村洋一, ○ 渡部良典, 山崎朝子, 木村真治, 片桐一彦

＊ Newsletter No. 13 (5 月)、14 (7 月)、15 (11 月)、16 (2003 年 2 月) 発行予定

＊ ウエッブ・ページ 随時更新

＊ 研究例会・全国研究大会・新事業等広報活動

【研究会運営委員会】◎ 中村優治, ○ 島谷浩, 櫻井敏子, 智原哲郎, Elizabeth Hiser, 法月健、伊藤彰浩, 大坪一夫, 小山由紀江, 塩川春彦, 飛渡洋

＊ 研究例会開催 第 15 回 (6 月 22 日 (土)) 麗澤大学にて （5 ページに関連記事あり）、第 16 回 (2002 年、11 月または 12 月、場所：愛知学院大学)、第 17 回（2003 年 5 月または 6 月、場所：北海学園大学）

＊ 全国研究大会 東京経済大学にて、10 月 20 日 (日) （5 ページに関連記事あり）

【新事業運営委員会】◎ 木下正義, ○ 永田博人, 大津敦史, 靜哲人, 峯石緑

＊ 第 3 回 JLTA 言語テストワークショップ 常磐大学にて、7 月 30 日 (土)、31 日 (日)（5 ～ 6 ページに関連記事あり）

【研究助成委員会】◎ 望月昭彦, ○ 卯城祐司, 和田稔, 平野絹枝, Eric John Ingulsrud

＊ 研究助成制度運営 （6 ～ 7 ページに関連記事あり）

【会計監査委員会】清水裕子, 竹村雅史

＊ 平成 13 年度決算報告監査 (5 月上旬)

＊＊

ライル・バックマン教授による
言語教育国際シンポジウム
参 加 報 告

シンポジウム：「コミュニケーションにかかわる言語能力ーテスト開発と測定・評価ー」
平成14（2000）年3月21日　1時～4時
主催：（社）日本語教育学会、国際交流基金関西国際センター、大学英語教育学会、日本言語テスト学会
協力：文化庁
会場：学術総合センター（千代田区一ツ橋）

去る3月21日（木）に、東京都千代田区の学術総合センターにおいて、L.F.バックマン博士をフィーチャーして「コミュニケーション能力に関わる言語能力ーテスト開発と測定・評価ー」と題したシンポジウム（主催：日本語教育学会、国際交流基金関西国際センター、大学英語教育学会、日本言語テスト学会）が開催された。パネリストは発表順に森戸由久（*創価女子短期大学*）、静哲人（*関西大学*）、大坪一夫（*麗澤大学*）、庄司惠雄（*群馬大学*）の4氏で、バックマン氏はコメンテーターという位置付けであった。

まずバックマン氏がいわば基調ミニスピーチ（10分間）として、Assessing Language Ability: Some Considerations and Issues というタイトルで、言語能力を測定し評価しようとする時には必ず、テスト結果の用途、アセスメントタスクと現実の目標言語使用の関係、および言語能力観を慎重に考慮する必要があること、そして言語能力観には伝統的に "language ability as something people can do"と、"language ability as the capacity for language use"という二つがあり、これらはそれぞれふさわしい用途も、妥当性検証のためのアプローチもまったく異なるものだ、という論を展開した。

引き続き4人のパネリストの発表に移った。森戸氏は、「JACET 英語聴解力標準テストについて」と題して、「英語聴解力標準テスト」「基礎英語聴解力標準テスト」それぞれについて開発の理念、経緯、アイテムの種類、今後の課題等について説明した。

静は「学校英語教育におけるインフォーマルなスピーキングアセスメント」と題して、通常の紙ベースの教材を用いた授業の中で学生に英語を話させる方略として、すべての応答（英語）を 0/1/2 の 3 段階で評定するために作成したエクセルブックの使用法を実演した。

大坪氏の「日本語能力試験から考える言語テスト」は、「日本語能力試験」を題材に、最近の言語テストが LSP に向かおうとする傾向に疑問を呈し、LGP を必要とする学習者の存在の重視を訴えた。またテストにスピード要素を加味することによって測定される構成概念をより真正なものに出来る可能性があるのでは、という問いかけを行った。

最後の庄司氏は、「標準日本語口頭能力試験の開発について」として、現行の日本語能力試験に欠けている産出能力部門のテスト開発の途中経過について発表した。現段階での姿は、受験者がビデオテープ等に録画されたキュー（例：「辞書を買ったら、中が汚れていました。お店の人に言って、取り替えてもらってください。」）に対して 30 秒考えて 1 分話した発話を録音し、それを分析的採点法によって評価する、というものである。まだ試行試験の結果を分析中であるということであった。

以上のように英語教育と日本語教育、インフォーマルアセスメントとハイステークステストというように発表内容が多岐に渡っており、かつそれぞれの発表時間も 10 分と短かったこともあって、やや全体としてまとまりに欠けた感は否めない。

休憩をはさんでの第 2 部では、バックマン氏およびパネリスト同士による質疑応答およびフロアからの質問をもとにしたディスカッションが行われた。ここでの焦点は先にバックマン氏が提示した二つの言語能力観をめぐるやりとりであった。静が、「言語能力とはすべからく外から観察不可能なものであり、具体的なタスクに対する反応を通じてその存在、あるいは程度や量を推測するものであるのだから、「can-do」観と「ability」観は同一のコインの表と裏のようなものであり、敢えて分ける必要はないのではないか」と疑問を投げかけたのに対し、バックマン氏は「can-do 観は、アセスメントタスクと同様な現実生活のタスクが遂行できるか否かに関るものであり、ability 観は語彙力、文法力等の個別能力に関する推測につながるものなのであって、完全に別物である」とした。さらに静が「しかし、人々ができる『事柄』を『言語能力』と呼ぶのは英語上無理があるので、それより、特定の(specific)状況や題材に関るタスクが遂行できる『能力』と、特定の度合いが低い状況やタスクが遂行できる『能力』と分けて考えれば『能力』観で一本化できるように思われる」と迫ったが、バックマン氏は「非専門家の考える言語能力は can-do 観であり、我々専門家が考えるのは ability 観であって、この二分法は現実に存在している。私は ability 観のほうがよりのぞましいと考えている」と譲らなかった。

時間の制約が厳しかった等の理由で議論が十分かみ合わなかった面があると言えよう。

静　哲人（*関西大学*）

講演会：言語能力測定に関する講演会「言語能力のパフォーマンスによる評価における妥当性の諸問題」Some Validity Issues in Performance Assessments of Language Ability
平成14(2000)年3月23日1時30分～4時30分
主催：(社) 日本語教育学会、国際交流基金関西国際センター
協力：文化庁
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター（渋谷区代々木）

Professor Bachman began his lecture by talking about recent discussions of "authentic," "performance" or "task-based" language assessment. He asserted that in assessing language ability in this way, it is necessary to reconsider traditional views of test qualities, which is especially true of validity. Assessment tasks in performance testing are designed to engage test takers in language use and require a wide spectrum of language ability, as well as topical knowledge, metacognitive strategies, and personal characteristics. There are two highly complicated validity issues here: (1) investigating and demonstrating the validity of the construct interpretations derived from test performance, and (2) identifying the domain(s) of generalization and providing evidence of such generalization. These complications are mainly due to two sources: (a) the greater complexity of the constructs we want to measure and (b) the greater complexity of the assessment tasks given to test takers.

In order to address these issues, Professor Bachman first posed several questions regarding construct validity and validity generalization: (1) What construct(s) is (are) assessed?; (2) What is (are) the domain(s) of generalization of assessment-based inferences?; (3) How authentic are test takers' responses to the test task?; and (4) How interactive are test takers' responses to the test task? He argued that these questions should be considered for any and all language performance task.

In discussing these four questions, he then listed three elements that should be considered: (1) a cognitively-based definition and model of the constructs/abilities we want to assess; (2) a clearly identified domain of "target language use" (TLU) situations and tasks; and (3) a set of distinguishing characteristics for describing both the assessment task and the TLU tasks. In addition, he illustrated how these three elements can be applied to performance assessment.

He then gave two characteristics that are often associated with performance assessment tasks and related to construct validity and validity generalization: authenticity and interactiveness. He pointed out that it is "useful to consider authenticity, interactiveness and construct validity to be functions of different relationships among the abilities of the test takers, the characteristics of the assessment tasks and two aspects of score interpretations, rather than attempting to lump them all together under the rubric of validity" (for the illustrated diagram, see Bachman & Palmer, 1996, p. 22).

Throughout the lecture, Professor Bachman stressed that we should not only "simply *consider*" language ability, task characteristics, and test taker characteristics but also use "logical analysis" and "empirical investigation" grounded on a sound theoretical framework in order to validate test tasks and inferences drawn from the test results.

In response to his talk, several questions were asked by the audience. One such example was "Isn't it paradoxical to regard language ability and topical knowledge as one combined construct?". His answer was that this is a matter of degree, and since performance assessment tasks, as well as assessment tasks in general, involve these two factors most of the time, it is not necessarily paradoxical to think of it this way.

Overall, the lecture was very informative and interesting in that he explained how essential it is to think of validity and TLU domains in constructing tests. However, it seemed a little too ambitious in its organization. For example, his three-hour lecture passed so quickly, and I wished he could have used more paraphrases in elucidating his ideas to better aid the audience in understanding his points.

In summary, he directed our attention to the importance of basing performance assessments rigidly on construct and task. Since the content of the lecture was related to the Symposium and the Workshop, reviewing the materials presented from all the three meetings will help consolidate the information for the participants.

At the end of the lecture, the UCLA Web-Based Language Assessment System (WebLAS; www.weblas.ucla.edu) was demonstrated. It had many attractive characteristics. For example, test constructors can make a web-based language test and test takers can take tests at home using the System in which all the procedures are processed on the computer. We can also handle short answer (and

essay) test formats by determining the range of correct answers by selecting synonyms provided by the System. Although the System is still in progress, many insights were drawn from his speech.

Reporter: Yo In'nami *(Tsukuba University)*

言語能力測定に関するワークショップ：テストの設計と作成
平成14(2000)年3月24日1時30分～4時30分
主催：（社）日本語教育学会、国際交流基金関西国際センター
協力：文化庁
場所：学術総合センター（千代田区一ツ橋）

このワークショップは、3月21日（木）に開催された言語教育国際シンポジウム「コミュニケーション能力に関わる言語能力ーテスト開発と測定・評価」と、3月23日（土）の言語能力に関する講演会「言語能力のパフォーマンスによる評価における妥当性の諸問題」に引き続き、今回の企画の最終プログラムとして開催されたものである。このワークショップには日本語教育学会、日本言語テスト学会、大学英語教育学会、国際交流基金関西国際センターから合計91名が参加し、6時間半に及ぶ講義と実習に終始熱心な取り組みが行われた。講義や実習の指示はパワーポイントを駆使しながらすべて英語で行われたが、質疑応答の一部は日本語の場合もあり、伊東祐朗氏（東京外国語大学）が通訳を担当された。ワークショップの参加者にはL. F. バックマン、A.S.パーマー著、大友賢二、ランドルフ・スラッシャー監訳の『<実践>言語テスト作成法』大修館書店2000年刊、またはその原本である *Language Testing in Practice*, Oxford University Press 1996を事前に目を通し、当日持参するよう指示があった。さらに、これまで作成したことのある言語能力診断テスト、プレイスメント・テスト、アチーブメント・テストなど言語テストに関する資料やアイディア、あるいはこれから開発しようとするテストの企画構想などがあれば持参するよう指示があった。講師のバックマン教授が作成された26頁にわたるworkshop-abstractが一カ月以上も前に全受講者に発送された。これらのことからも分かるように、このワークショップを受講するためには十分な予備知識と準備が必要であることが明白である。当日会場では *Language Testing in Practice* の必要な部分を抜粋した合計41頁のコピーと、資料冊子が配布された。

ワークショップは9時30分から12時30分まで第1・第2セッションが行われ、60分間の昼食時間の後、1時30分から16時30分まで第3・第4セッションが行われた。受講者は1テーブル4人のグループに分かれ、バックマン教授の指示に従ってテスト開発の模擬実習を行った。

ワークショップの冒頭に、言語テストの成績と実際の言語使用との一致の必要性と、信頼性・構成概念妥当性・真正性・相互性・影響・実用性などの特質からなるテストの有用性という言語テストの開発設計に不可欠な概論を確認するための講義が行われた。その後、グループ毎に上記テキストに紹介されている10のテスト開発計画を例題として、テストの目的・TLU domain（目標言語使用領域）とテスト課題のタイプ・受験者の特性・構成概念などテスト開発設計の各論に入り、それぞれの例題について特質を分析する作業を行った。

午後の実習は、テスト開発設計理論の応用として、これまでに参加者が作成したテストを教材として、そのテストの特性を分析した。次にこのワークショップの最後の課題として、テスト作成の模擬実習に入った。まずグループ単位で一つのテストを設計し、その設計を別のグループが受け取り、設計に従ってテスト課題を作成する作業が課せられた。次に、それを設計した元のグループは別のグループによって作成されたテスト課題を受け取り、期待通りのテスト課題が作成されているかどうかを評価することでこの実習は終了した。このようにして受講者はテストの設計から評価までの全てのプロセスを体験することができた。最後にフロアーから質問や意見が活発に出され、それぞれに対してバックマン教授が丁寧に応答されたため、予定よりも30分ほど遅れて閉会となった。

このワークショップは、綿密な事前準備と体系的な理論の解説および具体的な開発実習という大変密度の濃い充実した内容のものであり、受講者は初対面同士が多かったようであるが、和気藹々としかも真剣で意欲的に実習作業に取り組み、所期の成果を上げることができた。これはバックマン教授の非常にきめ細かな計画と準備に始まり、熱心なご指導と的確な解説によるものであり、このワークショップを企画し、完璧な準備と運営をしていただいた日本語教育学会をはじめ多くの関係者の方々のご尽力によるものと感謝する次第である。世界的に著名なバックマン博士を招聘して頂き、このようなワークショップを受講する機会を与えて頂いたことに対して、心から感謝の意を表する次第である。今回学習したテスト開発設計に関する知見と体験をさらに深め、その成果がそれぞれの教育現場で発揮されることを願っている。

（杉森幹彦　*立命館大学*）

※※

第15回研究例会のご案内

日時：2002年6月22日(土)　午後1時～4時

会場：麗澤大学（柏市光ヶ丘2-1-1）3203番教室　常磐線南柏駅から、徒歩15分、バスで5分程度

発表I　「自動的処理能力を反映する日本語テストSPOT」小林典子(*筑波大学*)

発表II 「口頭能力試験の調査・開発について」国際交流基金スタッフ

発表III 「日本語Can-do-statementsは何を測定しているのか？－ある大学のプレイスメントテストを外的基準としてー」野口裕之(*名古屋大学大学院*)

参加費：無料、但し非会員は、資料代等として1,000円

問い合わせ先：麗澤大学　大坪一夫研究室
E-mail: Kazuo.Ohtsubo@Reitaku-u.ac.JP

****

第6回（2002年度）全国研究大会ご案内と発表者募集

大会テーマ：：Language Testing and Second Language Acquisition Research (言語テストと第二言語習得研究)

日　時：2002年10月20日（日）8:30 ～ 18:00

会　場：東京経済大学6号館、
〒185-8502 東京都国分寺市南町1-7-34

参加費：会員1,000円、一般3,000円

研究発表申し込み：
研究発表希望者は、発表概要（英語の場合：250語、日本語の場合：500字）をe-mailにより、必ず次の2箇所両方に送付してください。1) nkyj@tku.ac.jp (中村優治) 2) toinby@parkcity.ne.jp (飛渡洋)。その際に次の事項を必ず明記してください。

1）発表者氏名
2）発表者所属機関
3）発表題目
4）発表者連絡先（e-mail address）

なお、e-mail送付の際の件名は「JLTA2002研究発表申し込み」でお願い致します。

発表概要の申し込み期限
2002年7月20日（月）

展示について
申し込み期限：2002年9月20日
費用：テーブル一脚につき、賛助会員は20,000円、一般は40,000円。

公告について
版下送付期限：2002年7月20日（事務局必着）
費用：A4サイズ1ページが、賛助会員は10,000円、一般は20,000円。半ページが賛助会員は5,000円、一般は10,000円。

展示・公告の詳細については、事務局にお問い合わせ下さい。

****

第3回JLTA言語テストワークショップについて

来る、7月30日(火)、31日(水)に、茨城県水戸市の常磐大学にて、第3回　JLTA言語テストワークショップを開催いたします。以下は、内容に関する予定の案です。最新の、詳細な日程につきましては、後日正式にお知らせいたします。また、随時、ホームページでもお知らせいたします。

7月30日 (火)

12:30 - 13:00　受付

13:00 - 13:30　開会行事、オリエンテーション

13:30 - 15:10　講義・討議　(100分)

「言語テストの基礎知識」講師：大友賢二 (*常磐大学*)

15:10 - 15:40　休憩

15:40 - 17:20　講義・討議　(100分)

「新学習指導要領における測定と評価の課題」講師：根岸雅史 (*東京外国語大学*)

17:30 - 20:00　懇親会

7月31日 (水)

08:45 - 09:00　受付

09:00 - 10:20　講義と実習 (80分)

「受容技能の測定と評価」講師：佐久間康之 (*福島大学*)

10:20 - 10:50　休憩

10:50 - 12:20　講義と実習 (80分)

「発表技能の測定と評価」講師：中村優治 (*東京経済大学*)

12:20 - 13:20　昼食

13:20 - 15:00　テストデータ処理実習　(100分)

講師：中村洋一 (*常磐大学*)

15:00 - 15:20　閉会行事

****

日本言語テスト学会研究助成の募集について

JLTA 研究助成の規約が決定いたしましたので、ご連絡いたします。なお、2002 年のみ、応募締切・審査期間・結果発表の日程を以下のように設定いたします。ふるってご応募下さい。

応募締切：5月18日 (土)
審　　査：5月19日 (日)～6月1日 (土)
結果発表：6月 3日 (月)

研究助成規約

1. 募集テーマ：

毎年 1 月末に、言語テストに関わるテーマを募集する。但し、研究期間は1年間とする。

2. 応募方法：

(1) 研究計画を日本語で 2000 字程度に、または英文で 1500 語程度にまとめ提出すること。

(2) 表紙には、研究テーマ、申請者氏名・肩書きおよび、代表者の連絡先(住所、電話番号、電子メール等)を記載すること。

(3) 助成金のおおまかな予算内訳を提出すること。

(4) 上記書類は全てA4 縦とするが書式は自由とする。

(5) 提出は本学会事務局宛とする。

3. 選考基準：

応募のあった研究計画のなかで、特にその内容の独創性が高いもの、学術的、教育的意義の高いものを選考する。

4. 応募資格：

応募の時点で申請者全員が本学会会員であること。

5. 研究助成：

各年度 3 件まで、1 件につき 10 万円を上限とする。

6. 入選者の研究報告および発表

入選者は、10 月末の全国大会で研究成果を発表し、翌年 4 月締め切りの JLTA Journal に投稿すること。

7. 選考と通知

(1) 助成の対象者は、研究助成委員会の審査・選考を経て、理事会が 2 月下旬に決定する。

(2) 採否の結果は、応募者全員に通知する。

日本言語テスト学会事務局
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758
TEL 026-275-1964　FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp
URL: http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html

JLTA Grants

We are happy to announce here the "Rules for Administering JLTA Grants". We look forward to your submissions. Please note that the following schedule applies only for the year 2002.

Application deadline:
May 18 (Sat.)

Selection:
May 19 (Sun.) - June 1 (Sat.)

Announcement of proposal selection:
June 3 (Mon.)

Rules for Administering Grants

1. Call for proposals:

Research proposals on topics concerning language testing will be received.

The application deadline will be January 31. The duration of proposed research studies will be limited to one year.

2. Application procedure:

(1) Prepare and submit a research proposal of 2000 Japanese characters or 1500 English words.

(2) Prepare a cover page with the research topic, names of applicants, and designated contact person (if more than one applicant) with address, telephone number, and e-mail address.

(3) Prepare a budget statement indicating the use of the funds.

(4) The format for the above forms are free, but they should be prepared on A-4 sized paper.

(5) All applications should be sent to the JLTA Secretariat.

3. Standards for selection:

Among the proposals received, priority will be given to those that are creative, and display a high degree of academic rigor and educational application.

4. Applicant qualification:

At the time of application, all applicants must be members of JLTA.

5. Grant amount:

Each grant will be the amount of ¥100,000. Three grants will be offered each year.

6. Presentation of research:

Grantees must present their results at the annual conference at the end of October, and submit an article to the JLTA Journal by the deadline of April 30.

7. Announcement of proposal selection:

(1) After the Grant Committee has considered the applications and made the selection, the results will be finalized by the board of directors at the end of February.

(2) All of the applicants will be informed of the final results.

The Japan Language Testing Association: JLTA Office

758 Shibahara Togura-machi Hanishina-gun, Nagano-ken, JAPAN (Zip code: 389-0813)
TEL: +81-26-275-1964
FAX : +81-26-275-1970
e-mail address: youichi@avis.ne.jp
URL: http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html

学　会　短　信

事務局より

◆ 今年度の会費納入につきまして、郵便振込を利用している方々は、このニュースレターに同封されている用紙を使用して、6月3日までに、納入して下さい。銀行引き落としを利用している方々には、郵便振込の用紙は同封されていません。こちらは、6月3日付けで、登録された口座から自動引き落としされる予定です。なお、昨年度まで利用していた業者の第一勧銀ファクタリング株式会社は、合併により、みずほファクター株式会社と社名が変わりました。ご承知置きいただき、ご確認下さい。

◆ 転勤、転居等、JLTA の名簿記載事項に変更が必要な場合は、速やかに、事務局までご連絡下さい。また、銀行引き落としによる会費納入を利用している会員で、吸収・合併などにより、銀行名、支店名、口座番号等が変更になった場合は、必ず事務局まで、その旨をお知らせ下さい。

銀行引き落としが不可になった場合、その年度のみ、郵便振込による納入をお願いしています。ご理解の上、ご協力をお願いいたします。

◆ JLTA の活動に対するご意見やご要望、Newsletter 等への掲載希望記事などがありましたら、事務局までご連絡ください。

Post script from Editor

• Question 1: "In many schools, few teachers could pass the final exam in the course they are supposed to teach" (M. Cetron & M. Gayle, *Educational Renaissance*, 1991). If this statement were true, would it be so bad? Discuss. Question 2: "In examinations those who do not wish to know ask questions of those who cannot tell" (W. Raleigh, *Laughter from a Cloud*, 1923). Do you agree or disagree with this statement? (Wt)

日本言語テスト学会事務局
〒389-0813　長野県埴科郡戸倉町芝原　758
TEL 026-275-1964　　FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp
URL: http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html

JLTA